



東九州支部報



蔚山支部との交流会(八丁原ヴェーホテル) (9月24日)

九月二十四日午後、東九州支部メンバーは自家用車にて筋湯温泉「八丁原ヴェーホテル」に集合。集まったメンバーは十六名で遠来の局を待つ。一方韓国側は蔚山を朝出発し、釜山港經由のコービーで博多港に十二時五十五分に到着。貸切バスにて筋湯に着いた一行は二十八名。

午後五時半から交流会の開会。司会は西事務局長で、冒頭に東九州支部の梅木支部長が歓迎のあいさつを行い、続いて蔚山支部の具支部長からごあいさつがあった。そのあと翌日以降の山行の計画などについて説明(加藤を行ったが、これには大分県がごく最近作ったばかりの、真新しい韓国語の九重山系の地図(たぶん発行後最初の活用と想われる)が配られて好評を呼んだ。このあと、双方からの記念品の交換があり、交流会は和やかムードで締めくくられた。

(二面へ)

筋湯温泉で交流会・懇親会

去る九月二十四日(日)から二十六日(火)の三日間にわたって、韓国山岳会蔚山支部との交流登山会が九重山系で行われた。これは、昨年十月七日、大分市紺碧のホールで行われた、韓国山岳会蔚山支部と日本山岳会東九州支部との交流会(支部報第三十一号千七・十・二十五号)の七頁に記載されているの場である。以下、その概略を報告する。

秋の九重連山を堪能 韓国山岳会蔚山支部との 交流登山会

《 も く じ 》	
蔚山支部との交流登山会	1
第5回青少年登山大会	3
牛ノ峰と伊予の山々	5
虎が峰	6
天神原山	7
ドロミテ、チロル、ベルリナ	7
ツクモ草を見に	8
北アルプスの報告	8
私の無名山ガイドブック	27
クラブ紹介①「府内山岳会」	10
お知らせ	10
後記	11



隊の意思疎通は必然的に断片的な英語のやりとりとなる。この道を経由するとか、あと何分まで着くとか、岩場なので注意して下さいとかを、先頭の具支部長に伝えると、彼が大声で他のメンバーへそのことを伝える

この後場所を移して懇親会場へ。ここでは日韓双方が互いに持ちまず、全員が向かい合って口の字形で揃ったところで、安藤(幹)さんの音頭で乾杯、少しお酒が入ったところで本日の参加者一人一人の自己紹介の場へと移る。まずは東九州支部から、会員番号順に並んだ席の順に進んでいく。通訳の金嬢がそれぞれの話を手ぎわよく訳している。それでも一人が四五分づつは必要となるため、なかなかかどらない。東九州支部の全員が終わったところで一休み。用意された「アリラン」と「坊がつる讃歌」の交歓。韓国語で書かれた歌詞が用意されて、歌が披露される。次いで、蔚山支部のメンバーの自己紹介。二十八名が終わる頃は通訳嬢もすっかり疲れてしまい、終わった後は何も食べる時間もないままに宴会終了の時間となる、というほどに延々と続く自己紹介であった。

九月二十五日(月)の朝、下山口の吉部へ車を廻すために四台がすぐに出発。他は八時に牧ノ戸峠に全員集合。一行二十八名をA、B二隊に分けて、A隊を支部員加藤、石川が担当、B隊を星子、中野、阿南、佐藤が担当。まずA隊から先に出発。A隊は最初は十一名であったが、途中でB隊の方から六名が移って十七名に増える。天気は曇との予報であったが意外と晴れており、一行のペースも快調でスムーズな登山となる。それで、当初の予定にはなかったが、まず星生山への登りを急遽入れる。通訳はB隊についているので、A

久住山から法華院へ

というあんばいだ。彼らの歩みはしつかりしている。特にA隊は健脚組を揃えているのだらう、隊列も乱れることなく、皆ついて登ってくる。星生崎の岩場ルートを経由して久住別れへ。ここでトイレ休憩をして、久住山への最後の登りも、全員遅れることなく山頂へ到着。



(久住山頂にて)

B隊も約二十分遅れで同じコースをとって到着。山頂で昼食後、全員で記念写真の撮影をして出発。空池のふちを経由して天狗ガ城へ登り、一旦下って中岳へ。九州本土の最高峰との説明をしてしばしの休憩。下山は、A隊は当初計画にはなかった白口岳経由で、B隊は計画通りに白口谷コースをとる。白口

大船山から大戸越

九月二十六日(火)、朝食後に両国の参加者全員が、東九州支部旗にサインをして、全員そろって法華院温泉での記念写真撮影、観音堂にある十一面観音(慶安2年(1649年)作といわれる)を見て出発。B隊は山に登らずにそのまま吉部へ、A隊は十七名で大船山へ。引率は中野さんを入れて三人で出発。

今日も天気は安定していて、快適な登りである。段原に荷物を置いて山頂へ往復。山頂では昨日歩いた九重連山の眺望をまのあたりにしてみな大喜び。北大船山を経由して、ミヤマキリシマ群落の中を縫うように通る狭い道では、せり出した枝に半ズボンの組はたいそう痛そうだったが、その下のガレ場はスムーズに通過する。大戸越から平治岳には登らずに大船林

道への近道を経由して林道終点の駐車場に出て、ここで三十分間の昼食休憩をとる。そして、林道から途中は近道を通って林道入口のゲートへ全員無事下山した。先に下りたB隊は貸切バスを迎えに行っており、吉部の弘蔵さん宅の前まで入ってきていたバスに全員乗り、飯田農協ドライブインの前広場へ。ここで二日間楽しんだ九重山の山行でのお別れ式。全員輪になって菅さんからお別れのあいさつがあり、最後に佐藤さんの万歳三唱でしめくくり。今夜の宿「別府亀ノ井ホテル」へと発つていく一行を見送って今回の交流



(大船山頂にて)

登山会を無事に終えた。来年は我が方が韓国に出かける番なので皆さん予定しておいて下さい。



歓迎いたします」という言葉が印象的でした。皆様、来年は韓国遠征を計画しましょう。

参加者：二十五日、二十六日参加
：西(孝)、加藤、佐藤(正)、菅、中野、石川、神麻
二十五日のみ：星子、阿南、久保、長野、二十四日懇親会のみ：梅木、甲斐(良)、甲斐(一)、飯田、安藤(幹)、西(あ)、渡部
計 十八名

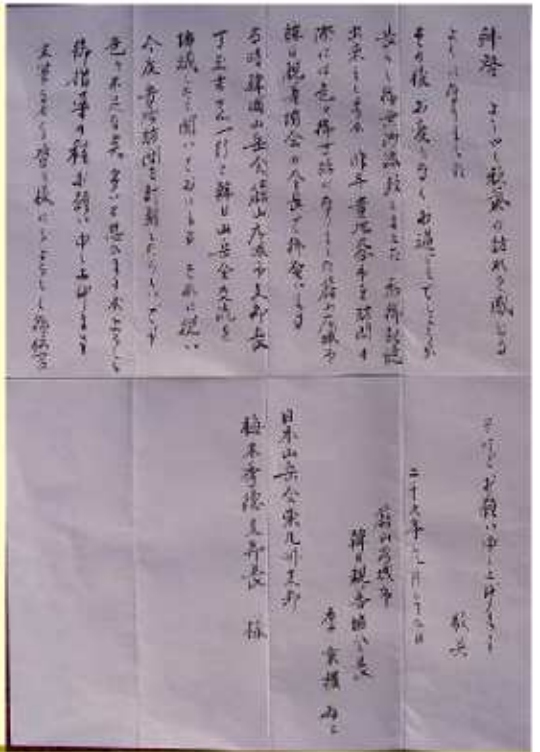
韓国山岳会蔚山支部：李顧問ほか二十四名、通訳一名、他二名、計 二十八名

コースタイム

この時期は九重は花の盛りも過ぎている、咲いてる花と言えざりンドウくらい、紅葉の季節にはまだ早く、何もない九重山ではあったが、二日間好天に恵まれて、満喫した山行ができました。当初予定していなかった星生山と白口岳を含めて、六つのピークを登れました。私のペースについてきた皆さんの体力の強さをあとからひしひしと感じた二日間でした。ただ、もう少し会話ができたらもっと楽しく案内できたのではないかと思います。当初の交歓登山という初期の目的は達成できたものと思いませんし、国際交流の一端をなしたとげたことは確かです。「来年は是非韓国の山にきて下さい。熱烈

九月二十五日(月)
牧ノ戸峠発 8:15 ↓ 沓掛山 8:35 ↓ 西千里浜 9:05 ↓ 星生山 9:53 ↓ 久住分かれ 10:30 ↓ 久住山倒着 11:05 (昼食、記念撮影) 出発 11:40 ↓ 天狗ガ城 12:20 ↓ 中岳 12:40 ↓ 白口岳 13:32 ↓ 鉢立峠 14:25 ↓ 法華院到着 14:55
九月二十六日(火)
法華院温泉発 8:00 ↓ 坊がつる 8:13 ↓ 五合目 9:00 ↓ 段原 9:27 ↓ 大船山頂着 10:00 ↓ 発 10:12 ↓ 段原 10:30 ↓ 大戸越 11:20 ↓ 発 11:33 ↓ 大船林道終点駐車場 12:30 ↓ (昼食) ↓ 発 13:00 ↓ 林道ゲート入口着 14:00

報告 加藤英彦



韓日親善協会の李会長よりの礼状です

今年も九重で

第五回青少年

体験登山大会

報告 園田暉明

台風のために延期となっていた第五回 青少年体験登山が八月二十日(日)、曇り一時雨、のまらずまずの天候の下、既に、秋のたぐずまいのくじゅうで行われた。総参加者は四十八名で、最年少参加者四才、特別参加者として分大講師 朴喜萬 氏であった。

占めてもなお空席があるという状態である。七時過ぎ出発。大分インターから高速道に入る。中野さん(支部員)による登山上の注意に合わせ、全員の自己紹介。東九州支部員と体験登山参加者(支部員以外で参加された方)が半々ずつか。児童、幼児の体験登山参加者は、同伴する父さん、母さんに連れだつて自己紹介するが、少し照れ気味によるしくお願ひします等の挨拶が実にかわいい。若者の山離れにより、現在の登山者は一部の例外を除いて私も含め高齢者ばかりである。若者の登山者を増やすため、この中の一人でも多くの子供が山を好きになるきっかけを今日の登山でつくつてあげたい。他の支部員の方も同じ考えであろう。

別府市の十文字原あたりで霧が多くなる。ここは、全国高速道路の中でも屈指の霧による交通止め地域であり、台風の影響の残るこの時期、霧が多いのは不思議ではないと承知しているが、牧ノ戸の天候が気がかり。湯布院インターから高速道を出て九州横断道路へ。九時前、曇りの牧ノ戸峠へ到着。

(2)三組に分かれて出発
ここでマイカーで直接来た方と合流し、登山口広場に集まるが、参加者は昨年とほぼ同じ総勢四十名。昨年の参加者もおろ、笑顔で会釈する。

(1) 牧ノ戸峠へ

前日、九州西北部に上陸した台風

集団登山は我々と韓国の少年グループくらいで、この時期登山者でこった返す牧ノ戸も、今日は天候との関係でか、いつもの賑わいはない。

梅木支部長が特別参加者の大分大学 講師 朴さん の紹介を入れて挨拶をする。日韓親善のために、特に、支部長が参加をお願いしたとのこと。

阿南さん(支部員)の指導で準備体操後、全員の写真撮影をする。この後、参加者を健脚組、普通組、のんびり組の三組に分けられる。私は八重先生、中野さん(いづれも支部員と)共に健脚組となる。リーダーは大分医科大教授をされていた野村先生。まず健脚組からスタートする。

(3) 霧雨で雨具を

登山口から沓掛山頂までは、一挙に約一五〇メートル上がるといふコース上の一歩の急坂。登山口から始まるコンクリー舗装の階段の道は、段差が結構あり足への負担がかかる地点であるが、さすが健脚組、遅れる人もなく、全員がそろって中間点の展望台広場に到着した。

沓掛山の肩の広場の直前、木製の階段あたりから弱い霧雨となる。断崖絶壁の頂上となる広場に歩いて小休止。ここでほとんどの人が雨具を着用。その間に普通組も追いついてきた。

れるのだが、今日は霧でダメ。一〇分程で私たちの組は出発。沓掛頂上の険しい岩場をゆつくり下り、転倒する人もなく無事に草原のなだらかな道に入る。雨はひどくならないままに止んでしまい雨具を脱ぐ人もいる。

ここからは、途中の一部に足場の悪い箇所があり距離も長い、久住山の直ぐ手前の久住別れに向かつて少しずつ高度を行く上げてゆく楽なコースへと変わる。草原の中の道は前日の台風にもかかわらず、荒れてなく歩きやすい。

道路脇には穂が出始めたばかりの萱が続き、時折、ツリガネニンジンの紫の花等も見える。ここは既に秋である。適度に風もあり涼しくて気持ちが良い。途中扇ヶ鼻分岐手前の小ピークで休憩。またもや後の一組が追いついてきた。早い人、遅れる人。西千里ヶ浜辺りでは集団が壊れ、健脚組と他の組が一緒に行くという状況になる。十一時過ぎ久住別れへ到着。

(4) 事故防止の注意

遅れた人の到着を待ち、三組の全員が集合したところで、西さんが、今後の行動について注意。支部員は久住別れから久住山頂までの往復の間、子供連れの参加者の支援、指導に、特に、心がけて欲しいとのこと。

ここからはコース二番目の急坂で、大小の石のガラ場であり、加えて、霧が出たり消えたり天候

から事故防止を考えてのものである。数年前には中学校の集団登山で、久住山頂からこの久住別れに降りてくる途中に、生徒一名が行方へ不明となっている。

私は八重先生と共に、それまで相前後して歩いてきた畑さん父子と組んで先頭を進む。畑さんの子供さんは知浩君。大分大学付属小一年生とのこと。実は知浩君、靴が小さいのか足が痛くて良く歩けないのだ。お父さんと両側から手を支えて励ます。

知浩君、足の痛さに加え、口には出さないが体もきついのだろう。自宅に帰ったらお母さんに、音を上げずに最後まで頑張ったことを話して欲しい旨、お父さんにお願いをしている。母さんから褒められることを励みに、耐えているのが分かる。

(5) 霧の山頂

私たち先頭グループは十二時頃山頂に到着。視界を雲に覆われ、晴れの日には見える、遙か遠くの阿蘇五岳(別名 寝観音)や眼下に広がる久住高原は見えない。一瞬空の一角に青空が現れ、眺めが良くなるかと思ったがすぐに雲に覆われる。

いつもはこった返す頂上も人は少なく、韓国の少年グループと我々の集団以外ほとんどいない。雨の恐れもあり直ぐに弁当を開く。汗をかいた後の食事はおいしい。遅れた組も順次到着し、あたふたと食事をすませる。そうしているうちにまた霧が出始める。



(霧の久住山頂にて)

初めて、二、三年前に改装された避難小屋のトイレにお世話になった。くじゅうにふさわしい立派なトイレというところか。

牧の戸までは同じコースを辿ることとなり、体験登山参加者に、往路とは異なった晴天時の山の姿、景色を見て貰いたいと思うが、天候に変化なし。

西千里ヶ浜で女性の方が、突然コース左側の肥前が城の斜面に一面に繁っている木の白い花を綺麗といい、近くにいた他の女性の方も一斉に相づちを打つ。

ノリウツギの花で、丈一メートルほどの木は、葉が病葉状になっており、花も終わりに近いことから、私の目にはそんなに綺麗とは映らない。

少しでもくじゅうを好きになるため、お世辞としてそう言われたのかしれないが、コース途中で、一度も聞いていない花をほめる言葉に、私は少し救われた気持ちとなることができた。

霧は消え少しは明るくなったが、曇りのままで、牧ノ戸に向かう。沓掛の岩場も難なく通過し、展望台広場では、一部の人々が山との別れを惜しむかのように休憩。

三時三〇分頃までに登山口に全員が無事到着する。天候が最高とは行かなかったが、体験登山者の方々の顔は喜びに溢れているようであった。

支部長の挨拶等の後解散。来年の再会を楽しみに、バスに乗って帰路につく。

(6) ノリウツギの花

久住別れでは再び深い霧となる。そのすぐ下の避難小屋設置の窪地に移り人員を確認。今回

牛ノ峰など伊予の山々

「丑」にちなんだ山旅

(七月月例山行報告)

中野 稔

七月二十九日午前二時五十分起床、大慌てで風呂と着替えを済ませ駐車所に降りると、佐藤先生が待っていた。サニースポーツを三時二十分に白杵港へ出発予定に遅刻したのは私の所為ではなかったので安心していった。今回の山行は七月八日が中止になった為、急遽決まったもので長梅雨のお陰である。登山とは自然を相手にするスポーツである事が改めて考えさせられた。思えば去年は数で言えば歴史的舞台上陸記録更新したかのような記憶に残り、ここ数年は温暖化といわれ地球規模で天災が各地で猛威を奮い、海面上昇の傾向も見られ、森林伐採に寄る砂漠化も一段と進んでいると思われ、最近オゾン層の事がニュースになっていない事が逆に不気味である。思い過ごしで済めばいいのだが。

四時四十五分白杵発、七時丁度八幡浜着。べた風の豊後水道を二時間十五分の夢路をさ迷った。定刻通り愛媛県に上陸すると、一路最初の目的地県道二十八号の郷之峠へカーナビを設定しアクセルを

踏む。最初に峠の西方、大洲市と八幡浜市の境に三角点のある浄心山(七八一・六m)を目指すことにしていたが、地図をみると山頂近くまで林道があるが、見ると峠から猛烈なブッシュなのでこの山を諦める。次いで峠の反対側にある石出山(いしずさん、八二二m)へ。峠から三〇分とある歩道の案内標識を見て、車でアジサイの中の車道を金山出石寺の駐車場まで乗り入れる。山全体が出石寺の境内の山頂部分には、何故か三角点の代わりに二メートル以上ある錆びた礎が佇んでいた。千二百年の歴史を有し、年間の参拝者十五万人を数え特に年末年始が賑わうとくる。大分県で言えば差し詰め佐伯の尺間山か福岡との県境にある英彦山位かも。

次に本日の目玉で、一等三角点のある壺神山(九七〇・五m)を目指した。しかし、山腹の戎川まで車が上がったものの、登山口へ至る道路が東側と南側の二箇所とも崩壊して通行止めのため断念。Uターンで次の目的地であり、今回の山行のメインテーマ、十二支の「丑」にちなんだ牛ノ峯(九八五・五m)を目指す。

出石山、牛ノ峯、高縄山は四国百山名にその名を連ねている。インターネットによると、愛媛県内の登山対象の山は三百六十座位有り、四国百山にはその内三十四座が含まれている。車は伊予上灘駅のところから山には入る車道を乗り入れ、牛の峰の西の肩にある

地蔵堂の広場に止める。パラグライダーの飛翔地から稜線にとりつこうとしたが、藪漕ぎのため、東隣の林道の堀割鞍部からの登りに切り替えた。林道の割りにはかなり立派に整備されているが、利用頻度に比べれば無駄で無意味な公共事業の見本だと思ふ。牛の峰への尾根道は展望は無く大分の山々でよく見られる植林の放置林であり、二等三角点は難なく見つかり、朽ちかけた表札を手に持ち記念撮影をすまし、ここで昼食。行きは五十七分、帰りは二十五分であった。



(牛ノ峰山頂にて)

地蔵堂の広場へ降りついたのは一時四十分過ぎで、時刻もまだ早いので次に、秦皇山(八七三・六m)を目指す事になった。秦の皇帝の山という意味かどうかは定か

でない。牛ノ峯から直線で東に約七キロメートルで、伊予中山から山道に入り山頂まで車で上る。秦皇山森林公園として整備され、山頂付近にはコンクリート造りの社と高さ十メートル位ありそうな鉄筋コンクリートの展望台が我々を歓迎してくれた。三等三角点は社の反対側百メートル位南西の方向の小高いところに、テレビ電波の中継施設の金網の脇に申し訳なそうに佇んでいた。江戸時代のよたほうが此れからの文明には逆に必要ではないかと思ふ。自然界を山や海をゴミ捨て場と化す文明が子孫に対して誇れると言えるのだろうか？

(秦皇山三角点にて)



山を下りるとまず食料の調達で、伊豫市の国道沿いのスーパーで買い込みをして、次は松山市内に入って道後温泉をめざす。坊ちゃん

温泉(道後温泉本館)で今日一日の汗を洗い流してさっぱりすると、一路今宵の野営地探しに郊外へ。明日の最初の目的の山である高縄山に向かいながら適当な場所を探すうちにどんどん上っていく。そして石ガ峠を過ぎ、高縄寺に近くなつたところの道脇に東屋を発見。ここを今宵の野営地としたが、此処は山頂直下までアスファルトの道が来ている所為か深夜過ぎまで車が時折行き来して、その度に私の脳波がアルファ波からベータ波に変わるのが分つた。夜の宴会は徹かに賑々しく進み、酒好きのメンバーが不足していた為、静かなる盛り上がりを見た。

朝は四時前に西さんの声で起こされ、朝食と後かたづけ。そして日の出を見ようとまだ暗いうちに山頂に向かう。標高九八六・〇mの山頂は大きな無線中継施設で占領され、その無線施設の鉄の階段を三階まで上つたところに展望台がある。まだ明け切れぬ中、日の出を待つが東の空は雲に覆われてお日様は容易に姿を見せない。一時間以上山頂で待ち続けたが諦めて下に降り、今度は三角点を探すと、無線設備横にある「高縄大権現」の社と権現様の石碑の裏にひっそり小さく小さく座っていた。

このあと北三方ヶ森へ向かうことになったが、途中古刹とも言うべき山頂近くの高縄寺に挨拶をし、心静かに余り手入れのされていない無人の境内を散策し千手杉を鑑賞した。高縄山の案内には、山頂

付近には温帯性の落葉高木であるブナの原生林が残っていて、春の新緑、夏の蝉時雨、小鳥の合唱や秋の紅葉と自然を味わえると書かれている。

さて、北三方ガ森へは、一番容易に上れそうな高為林道からの道を登ろうと、いったん国道三三七の水が峠トンネル手前までいくが、林道は入口でステンレスの鎖で遮断されている。そこで再び石が峠まで上り返し、高縄寺への分岐の少し先にある林道を、案内標識に誘われて林道に入り、車を止めて歩き始めるが、このルートは高縄山から北三方ガ峰への縦走路で、猛烈なブッシュといくつものアップダウンの難路と判明。引き返して谷沿いの県道を下り、室坂谷よりの登山口をやっと見つけて登り始める。谷沿いの道は全山スギの植林で覆われている。これを嘆きの森と呼んで欲しい。稜線につくと素晴らしい天然林となる。

自然林の中を歩くときの清々しさは、お金では買うことの出来ない至福の一時を与えてくれる。因みに今回の山行で登山らしい山登りをした唯一の山である。たどり着いた山頂からは、もやに霞んだ今治市街地が見えた。

登山口を探して一時間余り、山頂迄一時間四十五分、帰りは約一時間。三等三角点の有る北三方ヶ森は標高九七七、六mで、高縄山より約十メートル低い。十時五十分、下山して、故郷へとハンドルを回した。途中西海岸の展望

台の有る公園で昼食を摂った。世界を旅した人や、日本の山々を巡っている人、エベレスト詣でを年中行事のようにしている人にとっ、長閑で平和に満ちた一時がどんな意味を持つものだろうか？

(北三方ガ森にて)



参加者：西、佐藤(正)、飯田、中野

虎ガ峰 「寅」にちなんだ山旅

(八月月例山行報告)

安部可人

寅(とら)がつく山は九州で

はここしかないという。ケーブルテレビの録画「芸能人、岩を登る(一九九七年)」(アーカイブス)というテープを、事前に中野さんから借りた。虎ガ峰まで二時間という。一行は「赤壁」までいっている。

「北九州の山旅」(昭和三十六年)をみると「高岳頂上やこの岩場を見ることは、虎ガ峰登山などでも出来るのだから・・・、自己の力に合ったルートを選んできたものだ」(P196)とある。

八月六日(日)午前五時、サニ1店を九名が三台の車で出発。仙酔狭の東に砂防ダムがいくつもある谷がある。昔からの鷲ガ峰北尾根のとりつき地点だが、昔あつた仙酔尾根からのトラバースルートは今では完全になくなっている。工事用の道を通って上の方にある砂防ダムの脇、九一〇mの地点までいく。ブルドーダーなどのある工事現場の小広場に車を駐車。見上げると、仙酔尾根とそれに連なる高岳北面の荒々しい斜面があり、一方は夏草に覆われて上に延びる北尾根とその上の方には虎ガ峰の険阻なピークがそそり立っている。七時三〇分、スイカー一つを食べて出発した。

砂防ダムをわたり、登山道はもちろんのこと、テープすらない対岸の夏草の中に踏み込む。先頭は若手の佐藤(秀)さん、中野さんが交代で朝露のブッシュを分ける。その後を西さん、飯田さんがナタ

を使ってさらに伐り開いていく。牧野、岐部、安部、佐藤(正)、しんがり石川さんである。

果穂にはタンニンがあり染料になるという夜叉五倍子(ヤシヤブシ)、高いカヤに埋もれたミヤマキリシマ、白い花が開き始めたノリウツギなどをかき分けながら登る急斜面は、後に行く者も楽ではない。(先頭はさぞや大変だろうなあ)九八〇m、八時一〇分、カヤの中で小休止。水分をとる。

とりついた斜面は支尾根で、主尾根と合流する少し手前の、展望の開けた岩場でまた小休止。一〇三五m、八時四〇分。向こうの仙酔尾根を登る二つのパーティ、時折りゴンドラが音もなく上り下りしている。遠く広がる阿蘇盆地と外輪山・・・、上からは真夏の太陽が容赦なく照りつける。よほどの物好きしかいないみどり一面の雄大な世界。

ヤシヤブシやノリウツギ、カヤなどの濃いブッシュがいつの間にか草つきの斜面となり、傾斜も急になっていく。少し傾斜の緩い小広場で三度目の休憩。九時四七分。目の前の虎ガ峰は逃げはしない。今日はゆっくりペースの登山である。岩稜と草つきを選んで、慎重に急斜面を登っていく。高度感があり、下を見るとちよつと怖い。

山頂が真上に近くなると正面は絶壁で、素手では登れない。右を巻いて登ることにした。頂上まであと高度差二〇mほど、頂上から

南西に小さな岩稜が延びている。それを伝って偵察の先登若手三人は登っていった。本隊は先頭の飯田さんがその岩稜に登って、先登隊に「ロープを下ろせ」と指示する。しかし先登隊は「岩がもろくてロープはかえって危険ではないか」と言う。下の方の溶岩が固まったままの岩と違って、このあたりからはほとんど、もろい浮き石だらけである。この人数で、もろい岩場を登るのは危険と飯田さんが判断。「よし、ここまでで本日は終わり」「以前その先には行つてるから、私はここまでで満足」と西さん。適切なリーダーの判断で下山を決定。赤壁見物だけはしたかったが、向こうはガレて危険だというから仕方がない。悪場では人数が多いと一致した行動は無理である。

(虎ガ峰をバックに)



一一時二〇分、引き返す。ちよつと時間を食ったが、下の方の安全な台地の上(一一二〇〇m)で昼食をとる。(一一・五〇)

昔、右のガレ谷関門のちよつと上に滝があつて、みなでそこで岩登りの練習中に、約四メートル落ちて足を骨折した仲間を、首藤宏史さんと安達さんが交代で担ぎ下つたことを思い出す。

高登研の仲間、首藤さんや故金丸寿雄さんは鷲ガ峰を登はんしているが、私はいらい岩登りとは無縁である。

一二時三〇分下山開始。九人が踏み開きながら上つたヤブは、登りと比べるとはるかに楽である。一〇一五m地点の平らな岩の上で休憩。恒例の山頂万歳もここで行う。そして、少し遠ざかった虎ガ峰を背景に写真も撮る。

ブッシュ帯に下つても道は完成されており、楽な下りはしつこくアブにつきまとわれたり、安らぎのウグイスの声を耳にしたりしながら下っていく。一四時三五分砂防ダムをわたつて駐車の小広場着。すぐに私の畑でとれた冷えたスイカを割る。みんな「美味しい、美味しい」と言いながら腹いっぱい食べてくれて嬉しい。帰りは途中で回り道して、産山の「花の温泉館」で全員入浴。山の汗を洗い流してすがすがしい気持ち。クーラーの効いた部屋にないなくて、勇気を出して夏山に登れようか。

参加者：安部、飯田、石川、岐部、佐藤(秀)、佐藤(正)、中野、西、牧野

天神原山

(九月月例山行報告)

中野 稔

今にも降り出しそうな雲行きの早朝の大部分を定刻の五時にアクセルを踏んだ。今月の十二支にちなんだ山は「卯」ということで「兎」。無理にこじつけたのが大崩山系の一角にある頭巾岳だ。目的地へは杉ヶ越の県道六号にて宮崎県に入り中村橋から日隠林道にて登山口を目指す予定だった。トツキン岳、兜巾岳、頭巾岳、兎巾、いずれにしても標高は一、四八〇メートルだ。

五台の車は宇目の木浦小学校の前に七時前に集合して再出発。峠に向かうにつれて雨脚はどんどん強くなり、ワイパーも役を果たさない有様。雨脚のご機嫌を伺いながら大明神越の手前にある広場の東屋で話し合いを設けることになった。そして、日隠林道は土砂降りでは遠慮したほうが無難であるという事で、安全を最優先して行き先変更。急遽定まったターゲ

ットは、とりあえず手近で無難に行ける山と言うことで、天神原山に決定した。

登山口である女郎墓の先にある大越峠の手前に駐車して登山を開始した。いつの間にか雨は小降りとなり、雨具はリュックに仕舞い込み、傘を手を持っていく人もいたが、活躍することはなかった。時刻は八時を過ぎていた。九二〇メートルのピークには八時二十三分、山頂には八時四十一分と順調に足を運んだ。



山頂で小休止の後、下山開始。トラブルは時と場所を選ばずに発生するものだ。ほんの小さな一歩がやがて二時間半の捜索ドラマを生んだ。もともとこの山は、だだっ広い鈍頂で、勾配の緩い山腹を大きく広げている。おまけにどこを歩いても同じような林相で、目印を見失ってしまえばどこに下る

やら行方がわからなくなるような、高さのわりには気の抜けないところがある山だ。頂上から下りはじめてほどなく、先頭を行く一人が目印を見損なつたまま下り、皆もつられて何気なくついで行き、「あれっ？おかしいよ・・・」で軌道修正。そこまではよかったがさらに事の始まりは、霧の流れる林の中で、先頭を行く人が九二〇メートルのピークから東に曲がらなければならぬところを、何故かまっすぐに南尾根に足を踏み入れたのだ。それを後続の列は気づかなかつた。そして、下山後に「あれっ？先に下つたはずなのに、居ない」と気づいた。まさかとは思いつつ、男組は九二〇のピークまで戻ってみる。物事は困つたら初心に帰れと先人達はよく

俳句

下ロミテ・チロル・ベルリナ

アルプス周遊フラワー

トレッキングより

(六月二日〜七月一日)

安藤セツ

大阪城 空より眺む 梅雨晴間

ドバイ発つ みどり失せたる 地のつづく

民族の 衣の文化あり 夏ドバイ

名岩峰 ひと周りにして 夕立かな

ピッコロの 名ある岩峰 雲の峰

クライマー どこに消したか 夕立雲

夏陰や 葉穴と声の マーモット

登山靴 一歩一歩を 確かめて

雪渓の スプリンカット ミミに果て

モーツアルト 妻を伴ふ 避暑の宿

夏蝶の 肩に休みて 又空に

チロルきて 電車道より 夏嶺かな

遠山に 声をかければ 餅して

虎尾草 スイスの岡に くじゅうにも

泰山木 花の白さは 異国にも

子ども等の 駆け出しており 大夏野

留守の間に サルビアの花 盛りなり

夏座敷 十日留守して 夫と入る

宅急便 洗濯物と 登山地図

この句はセツさんから私に頂いものを、本人の了解を頂いて私が投稿しました。(あずさ)

ツクモ草を見に

福丸勇二

言っているが、今回も例外に漏れずに無事に解決した。フランスの諺にあるように、冷静よく人の心を制する、とある様に最善の手段は冷静な心から浮かんでくるものだ。

とまれ、何もなかったように山行は終了。一行は天神原山の麓にある藤河内の「湯くとびあ」にて冷汗を流し、座敷にて食事をゆつくりとった。飲酒運転で問題がエスカレートしてきているので、日本アルコール組合の方々は肩身の狭い思いをしている事だろう。更にフランスやハワイでは全面禁煙地帯に成り、やがて禁煙惑星になるものと個人的には神の存在よりも信じている。

結果的に、頭巾岳に行っても大丈夫だったのかもしれないが、これで良かったのかもしれない。

参加者：安部、飯田、岐部、佐藤（正）、神麻、得丸、中野、西、牧野



今回は、ツクモ草をみに行くことにしました。

六月の第三週の週末、夜半から大雨もあがつた甲府より八ヶ岳へ美濃戸口から、赤岳山荘の駐車場を十時前に出発、川沿いの林の中をしばらく登ると、行者小屋につきました。中岳の谷までの急な登りをつめると日陰にはまだ雪が残っていました。

阿弥陀を往復し、岩肌の赤岳は結構な登りでしたが展望がよかったですのでゆっくりいきました。四時前には展望荘の受付済ませ、談話室にしていると2パーティ来たので一

(ツクモ草)



緒に、例のごとくの交歓会となりました。

二日目は、パノラマ尾根を北へ行き、横岳山頂付近では目的のツクモ草の写真におさめました。山頂過ぎるとすれ違うひとごとどこでたくさん見れますかと聞かれ、おもわず苦笑しました。そのあと硫黄岳の広い山頂で、展望をしばし楽しんだ後、梅雨の合間の天候に恵まれた八ヶ岳を下山しました。

※注：ツクモ草はキンポウゲ科オクナグサ属、分布はツクモ草はどこでも見られる高山植物ではない。北海道と本州では白馬岳周辺と八ヶ岳だけの雪解け間もない六月はじめにだけに見られる特産種である。

北アルプスの報告 (NO1)

加藤英彦

私は北アルプスの山々に憧れる。そのなかでも特に穂高から槍が岳へと続く稜線におもいをさせる。私の事務所には北穂からみた槍が岳のパノラマ写真がかざっている。毎日これを眺めては登った気分ひたっている。そもそも昭

和三四四年夏 高校三年のとき山岳部の北ア遠征で穂高、槍、蝶が岳、入浴をすませてすぐに就寝。

八月二日 四時すぎ起床 五時すぎには朝食すませ六時出発。天気予報では午前中はもちそうだが午後からは雪渓、途中にひろがるお花畑や樹林帯、そして真夏の青い空、すべてが持っている雰囲気を持ちたかぶらせる。その包み込む空気が九州の山では味わえないものであり、はるばると訪ねて登ってみてその魅力に接することになり、満足感を味わい充実に浸るのである。

今回槍は一〇年ぶり穂高は七年ぶりの山行となった。メンバーは福岡の同級深見君と長男平治の少数精鋭の三人。

八月一日 午後七時別府港発関西汽船

八月一日 朝六時二〇分大阪南港着 地下鉄にて梅田へ。ここで熊本からの夜行バスにて着いていた長男と合流 八時発阪急バスにて一路松本へ。お盆の慢性的な渋滞で二時間おくれの三時三〇分松本着。駅前のコンビニにて食糧を仕入れ、四時一〇分発新島々乗り換え上高地へ。五時五〇分着。今夜の宿日本山岳会 上高地山研へ。上高地にて宿泊はこの山研が安くて便利だ。管理人が若い夫婦に四年前とはかわっていた。今夜は三人だけの貸切だ。七月中旬の大雨は上高地始まって以来の規模の大雨であったらしくて、水の設備の害は大変な

痛手だったようだ。少ない水での食すませ六時出発。天気予報では午前中はもちそうだが午後からは雪渓、途中にひろがるお花畑や樹林帯、そして真夏の青い空、すべてが持っている雰囲気を持ちたかぶらせる。その包み込む空気が九州の山では味わえないものであり、はるばると訪ねて登ってみてその魅力に接することになり、満足感を味わい充実に浸るのである。

屏風岩を左に眺めながら道はのぼりにかかる。横尾岩小屋を過ぎて樹林帯には入り登りになる。屏風岩の顔が横になるあたり本谷橋を渡り小休止。以前は丸太の橋だったが立派な吊り橋となっている。ここから勾配もまじりののぼりとなる。大切戸の稜線がみえだし、北穂、涸沢岳、奥穂が見えるようになると、やっと涸沢ヒュッテの旗が見えてきて、屋根が確認できる。しかしここからあえぎあえぎの登りであり、今年の大雪のためか、最後かなりの雪渓が残っており雪上の道を登りきりヒュッテのテラスに着く。

やはり久しぶりの涸沢の景色は気持ちいい。色とりどりのテントと広大な雪渓、そして穂高の山々にかこまれてまさに圧巻です。テラスにて昼食とする。食べ終わってころからぼつぼつとふってきた。やはり予報どうりだ。やがて強い

風まじりの雨となりだんだん激しくなってくる。雷もまじってくる。一時まで待ったが雨はやまず今夜はここで泊まる事と決め、チェックインとする。本館の明神の間に押し込まれしばし昼寝とする。その間にも次々と登山者は増えテントも増えている。

二時過ぎるころには激しかった雨もやみ、夕食までの間しばし酒沢でのくつろぎの時間となる。夕方ヘリがきて駐在の救助隊員をのせて飛んでいった。西穂の方で雷のため動けなくなったパーティの救助だったようです。あの激しい夕立のなか歩かなくて正解だったようだ。酒沢での満天の流星群の星空をみて就寝。

テ一 二一九
一時ヒュッテチェックイン

私の無名山ガイドブック27

飯田勝之

鶴見北尾根の隘道

(その4)

「鍋山尾根ルート」

別府市街地から鶴見北尾根の稜線を見ると、その山腹に大小二つの三角形の草原のピークが見える。左側の大きな方は言うまでもなく扇山で、その右の小さな三角が鍋山だ。

今回はこの鍋山から鶴見北尾根主稜線にいたる「鍋山尾根」(という名があるとは聞いていないが私はそう呼ぶことにしている)を紹介しよう。

明礬温泉の薬師寺入口の脇から鍋山の湯に至る道が、途中から砂利道となって続いている。この道がグラウンドの横を通り、木々のトンネルを抜けると、左手に別府市街地と別府湾の視界が広がり始めたところで、右上の草の斜面に登る小さな踏み分け道がある。



林地が終わり、萱野の急斜面の直登となる。防火帯が刈られた後なら歩きやすいが、萱が繁っている時はラッセルとなる。五分ほど登るとそこから先は林で、ここが市街地から見える小さな三角形の頂点、地図上の鍋山の肩にあたる。振り返れば別府湾と別府・大分の市街地など広大な眺めが広がる。

ここで一休みして眼下の景色を楽しんだら、そのまま前方の藪にこぎ入る。と言っても、かつてはかなりのブッシュであったが、近年はすっかり磨かれて入りやすい。そして、ツツジやササのブッシュを少し分け進むと、高いアセビの木立ちの中の快適な山道となる。道は東西に連なるほぼ平らで、幅の広い稜線の南の端につけられている。この道

は、以前はやつと分かるような踏み跡であったが、今ではかなりハッキリとした踏み跡で、伐開もされて立派な山道となっている。

林の入り口から一〇分ほど、稜線上の緩やかなピークを通過する。ここが『鍋山』の山頂である。さらに数分、左が切れ落ちた絶壁の上を通過する。下の方には白土の露出した広大な谷間が見え、鍋山採石場の跡で、その端には『鍋山湯』と、そこを訪れて

いる人影も見える。大きなヤシバシが懸崖のようになつて崖から半ば垂れ下がったり、巨大なシデの根が岩からみついたりしている稜線の道をしばらく登っていくと、やがて広い斜面の登りとなる。大きなアサダの木やヤマザクラ、カエデなどの混じった混交林の中の、広い稜線上で方向感覚を失いがちだが、かなりはっきりした踏み跡と、点々と目印のテープもあり、迷うことはなかるう。

シャクナゲが目につくようになり、傾斜がほとんどなくなると、林の入り口から約一時間で平らな台地の上に立つ。周りはカエデ、リョウブ、シデ、エノキなどの木立で、夏なら鬱蒼としたたざまいのなかのせみ時雨、冬でもシートといた幽玄さを秘め、雪の積もった時などは市街地から一、二時間の地点に居るとは思えない深山の雰囲気を感じさせるところである。

林床はミヤマシキミやハイノキなどが覆い、その手前のあたりまで、割合はつきりしていた踏み跡は急に判然としなくなる。その台地は、地形図の八〇二mの標高点の北側で、まっすぐに、わずかに下りながら進むと塚原越から十文字原に至る縦走路と合流する。縦走路を右にとつて狸味から湯山へ下り、車を置いたところまで帰っても良いし、左にとれば山腹をトラバース気味に登り、アセビの繁茂する古いジグザグ道を登って塚原越に出て、兔落ルートか尾



(酒沢のテント村)

コースタイム：上高地山研発六：〇〇↓明神六：四三↓徳沢七：三三↓横尾八：三二↓本谷九：三三↓酒沢みえる一〇：四一↓酒沢ヒュッ

シリーズ

会員所属の山のクラブの紹介コーナー (NO1)

「大分府内山岳会」

会員（会友）の所属する山のクラブ（山岳会、同好会等）を紹介するコーナーを新しく始めました。初回は「府内山岳会」です。視覚障害者の方達の登山を支援するという活動に数回参加したことのある編集子が、いの一に頭に浮かんだのが「大分府内山岳会」の名前です。また、去年は初代会長の橋本祥案先生が、卒寿（90歳）の記念登山で久住山に元気に登られた事も嬉しいニュースでした。

1. 大分府内山岳会の歩み(佐藤善則会長に原稿をいただきました)
昭和34年…西大分山の会を創立 初代会長 橋本富夫(橋本祥案)氏
昭和38年…大分府内山岳会と改称 会長 橋本富夫(橋本祥案)氏
平成元年から…会長 佐藤雅司氏
平成4年から現在…会長 佐藤善則氏

2. 登山について (山岳会勉強会資料 昭和35年作成 橋本富夫著)

① 登山の意義

登山とは、山に登ることである。高さ、険しさ等に於いて多様である。頂上へのコースは、一つではない。人々によって、登山内容も、考え方も違ったものになる。

大衆的なスポーツとしての登山は、楽しい健全な運動として意味づけられている。

② 登山のマナー

- ・登山の道徳
- ・登山者の自主的にやるべき心構えや言動
- ・山を愛し謙虚であること
- ・安全で楽しい登山でなければならない

これを引継ぎ、謙虚な気持ちで登山をしている大分府内山岳会である。

3. 山岳会の活動

- ・月1回の山行例会は昭和40年から続いている
- ・平成3年から視覚障害者の支援登山の活動、今年（飯盛ヶ城）で13回目を迎える
- ・平成10年から豊の国ねんりんピック親善交流登山の協賛

4. 視覚障害者の支援登山

前大分府内山岳会々長の佐藤雅司氏（故人）が「視覚障害者の皆さんと一緒に登山が出来たらいいねえ」と話された一言がきっかけで始まった。

5. 機関紙「岳友府内」の発行は年に2回発行

(文責 長野瑋子)

参考コースタイム
尾根とりつき地点—三五分↓
↑二〇分—鍋山の肩—六〇分↓↑
五〇分—縦走路

縦走路—一〇分↓↑一〇分—
狸峠—六〇分↓↑七〇分—湯山—
三〇分↓↑三〇分—尾根とりつき
地点
縦走路—三〇分↓↑二五分—
塚原越—一〇〇分↓↑一二〇—鍋
山—湯—二〇分↓↑二〇分—尾根
とりつき地点

お知らせ

大分報編集委員
会を設置しました

支部報をいっそう充実したものにするために、編集委員会を設けることが四月の定例総会で決まりました。その委員の選任につい

ては、ご本人の了解を頂きながら選考を進めてきましたが、七月一日に開かれた役員会で承認されました。
編集委員に決まりました方々は次のとおりです。今後取材や原稿依頼などで編集委員がいると支部会員、会友の皆様と接触することもあろうと思いますが、皆さんどうか宜しくお願いします。

編集委員

会員より：飯田勝之、佐藤秀二、
中野 稔、西あずさ、福丸勇二
会友より：安部可人、長野瑋子

十一月月例山行のご案内

・月 日：十一月十九(日)
・目的地：蛇谷山
(谷ガ迫山(389.5m))
(国東市武蔵町)

・出 発：午前六時三十分 出発
巴(み)の山旅

・現地集合：武蔵支所前
午前七時半

・もうひと山近くの山(大嶽山を
予定)に登ります。

十二月月例山行のご案内

・月 日：十二月九、一〇日
(土、日)
・目的地：馬籠ヶ岳(85.2m)
(山口県、周南)

・出 発：十二月九日午前五時
午(うま)の山旅

・翌日は近くの山口県の山に登
ります。

・テント、シュラフ、食糧、防
寒着等野営の準備をして下さい。

一月月例山行のご案内

● 月 日：一月二三日(土)、
一四日(日)

● 目的地：猪群山(598.2m)
(豊後高田市・真玉)

亥(じ)の山旅

(十二支会との交歓会)

● 日程：詳しい日程等は後日はがきでお知らせします。

二月月例山行のご案内

● 月 日：二月十二日(日)

● 目的地：大仁田山(望洋台)
(1315.6m)

(宮崎県・五ヶ瀬)

未(ひつじ)の山旅

● 出発：午前五時サニー発

○ 毎週土日山歩きしていると、不安という漠然とした概念に囚われている囚人のような自分を鏡の中に発見する。肉体がお風呂で綺麗になる様に心は自然の中で綺麗になるように思う。

○ 心の森林浴だ。文明の進化のスピードは、江戸時代よりは一桁速いような気がする。江戸時代の文明のスピードは、乗り物に代表されるように、時速数キロから数十キロ程度だね。今日では、肉体は数百キロで移動可能だし、声や映像は光の速さに近いものが有る。

(中野)

○ 久しく訪れていない北アルプスは、今頃白い衣裳へと変っていることでしょう。さて、年末はどこへ出かけようかと翼を広げながら地図をごらんになったり、ガイドブックを読んでいる方も多いことでしょう！どうか安全に雪の季節をお楽しみください！

(あずさ)

○ 今年の3月に「清水の舞台から飛び降り」で転職することにしました。先日、現場を見るために「清水寺」に行きました。

○ 「舞台」は思ったほどの高さはなく一命を取り留める可能性もあると思えました。おみくじを引くと「大吉」でした。どうかおみくじが当たりますように！！

○ S会長様。快く原稿を引き受けてくださったって有難うございませした。次回はどこなのところに白羽の矢が？…それぞれの山の会に所属しているアナタ、情報をおください。アナタのところへ飛んで行きます。ご協力方よろしくお願ひします。

○ 一〇月七日、乗鞍岳に登ろうとしたけど重量の無い私は吹き飛ばされそうな暴風雨で、肩の小屋までの往復がやつとでした。スカイラインの紅葉はもう少し先のようでした。

(早起き出来ないコケコッコ・瑠子)

○ 十月十九日、黒嶽荘から初めての雨埴ルート、黒岳東南の中腹を風穴へ向けて、石川氏とハイキング。雑誌「グリーン・ウオーク」を手にして歩く福岡の人と出会った。彼らが飯田さんの(秘)ルートを開拓していく。私も助かる・・・。

(安部)

○ 最近、九州の山の植林地に至るところで皆伐されて、その後が造林されることなく放置されているところが目立ちます。先日、囲峠から新百姓山へ行って来ましたが、藤河内溪谷から上る林道の両側に広大な皆伐のあとがありました。

(佐藤(秀))

○ 赤茶けた地面を露出したままの状態になっている様は痛々しいというか、無惨と言うか・・・

○ こうした露地の斜面は台風や大雨にあうと山の崩壊のもとになるでしょう。この斜面が大崩壊し、土砂が藤河内溪谷に流れ落ちるのを想像するといたままれない思いがしました。

(K・I)

「三」は何処？



● この写真は何処から何処を撮ったものでしょう？
● 事務局までがきでお知らせ下さい。当たった方には記念品をさし上げます。(二名まで)

で、正解多数の場合は抽選します。締め切り一月三〇日

つ く も 草



後記

○ ハケ岳降りたあと、ドライブで佐久方面へ行った帰り道、時間があつたので、海ノ口城跡を訪ねてみようと思った。

○ しかし車置いた後ひとけのない山道十五分程歩いて、舗装がきたところの茂みのかげに徒歩一時間の看板あり、これを見て次の機会にしようと即決しました。

(福丸)

日本山岳会東九州支部報 第35号

2006年(平成18年)10月25日(水)

発行者 梅 木 秀 徳 之

編集者 飯 田 勝 之

発行所 〒870-0021

大分市府内町1-3-16

サニースポーツ内 西 孝子方

TEL・FAX 097-532-0926

題字 佐藤正八